



Title	「北海道の草の根文化概観」展示
Author(s)	堀田, 真紀子; Horita, Makiko; 加藤, 康子 他
Citation	国際広報メディア・観光学ジャーナル, 13, 63-86
Issue Date	2011-11-30
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/47567">https://hdl.handle.net/2115/47567</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	JIMCTS13_006.pdf



## 「北海道の草の 根文化概観」展示

大学院国際広報メディア・観光学院／メディア文化論講座  
堀田真紀子・加藤康子

### View of Grass-roots Culture in Hokkaido

HORITA Makiko, KATO Yasuko

abstract

This is the extract of the exhibition held during the Conference “The Age of the Grass-roots Culture”. The aim of the exhibition was to concretize the arguments about the Grass-roots Culture in these local examples, cultural expressions which are deeply rooted in the situation of a time and place. Particularly its potentiality to inspire confidence and shape the identity of socially and economically deprived people is taken into consideration.

北海道の地方に目を向けると、高齢化や過疎、経済的な疲弊など大変厳しい状況にあるものの、その一方で、毎年人口が増え続けているマチや、住民が生き活きと暮らしているマチがあります。そのマチに行ってみると、やはり住みたくなる理由があるのです。そのマチでしか体験出来ないモノがあったり、素敵なネットワークがあったり、住民がそこに「住みがい」を感じて生活できる仕組みが備わっているように思います。それらは決して偶然に出来上がったものではなく、住民が自分のマチの資源を真剣にみつめ、宝物として掘り起こし、芽が出るまでの長い時間や経済的苦境などを耐え忍んで、それぞれ試行錯誤の末に築き上げてきたものなのです。

地元で高視聴率を誇る地元密着型住民参加型のFM放送、旭川圏に息づく木工文化、高齢者自主制作のミュージカル映画シリーズ、炭鉱遺産の新たな拠点と活用、農場のアートギャラリー、個性的な活動で全国の注目を集めるアートホールなど、ここにご紹介するのは、そのほんの一部にすぎません。それでも、こうした事例の数々は、文化が単なる住民の教養や娯楽にとどまらず、現代においては、地域社会に新たな対話の回路を築き、マチの血流を活性化させる働きを併せ持つことを示してくれています。また、こうした住民が自ら種を蒔きその地に育てて来た「草の根文化」の事例の数々は、その地域のみならず、他の市町村にとっても大きな可能性を示してくれているように思います。

2010年10月30日、北海道大学遠友学舎で、シンポジウム「地域発・草の根からの文化発信」が開催された折、会場内の別室で、北海道の草の根の文化的な事例の数々を、パネルや映像、各団体が発行した冊子等で紹介する企画展示を行いました。それぞれ限られた字数での簡単な紹介ではありますが、各地の事例をまとめて見直してみると、北海道は自然や農水産物のみならず、独自の「文化資源」を築きあげてきた豊穡なエリアだと実感させられます。それは、この地に生きる時間をより充実させようとしてきた、先人と現代の住民の努力と叡智の集積でもあり、深い敬意を抱かずにはおられません。

この研究ノートは、シンポジウム「地域発・草の根文化の時代」の北海道会場で行ったパネル展示内容をまとめたものです。では具体的に草の根文化で、どんな文化活動をイメージすればいいのか？ これは、北海道には、今、どんな草の根文化が繁茂しているのか、具体例を示すものです。もちろん、ここで示された例はほんの一部にしかすぎませんし、また、それぞれの記述も、まだまだ不十分なものです。ただ、探究の手掛かり、議論のたたき台を提供するものにすぎません。

この展示は、当時修士課程1年の加藤康子さんが中心となり、本学院の卒業生である梅沢明史さん、野坂政司先生と、私も一部執筆担当しています。資料、コメント、意見をよせてくださった関連団体、個人の方々も、共作者といえます。

最後に、ご多忙の中、本シンポジウムの展示に惜しめない御協力を賜り、

貴重な資料や資料映像などの使用を快諾して下さいました各団体・個人の皆さまに、改めて深く感謝申し上げます。

## 1 追分の声の襞の一つ一つにこめられた 江差の風土、漁村、港町の暮らし、先達の 苦労や思いを守る——江差追分会館

その土地で歌いつがれてきた民謡を聞くと、土地の自然や風土、何を生業にするどんな人々が住んでいて、何を感じ、考えながら暮らしてきたか、その苦悩や喜びが、ひびきやリズム、歌詞のすみずみに織りこまれているのに気づく。たとえばかつて鯨漁と北前船の交易で栄えた北海道南部の港町江差で歌いつがれている追分もそのような民謡の一つで、その声の揺れ一つ一つに、日の光をあびてさまざまな色に輝きながら、その時々、穏やかだったり高らかにうねる海の波のイメージが結びつき、またその波のうねりに望郷や別れ、働く喜びや苦しみといった人々の思いが歌いこまれているのに気づかされる。下のような証言をきくと、歌を歌い継いでいく人々自身、歌を暮らしと密着したものとしてとらえていることがわかる。江差追分の名手である漁師の青坂満は子供時代を振り返って次のように語っている。

漁師はいつも舟に身体をあずけてひとりで沖に出てゆく。時化でも来れば命がけの危険にさらされる。まして今のように、安全設備などない時代だから権一本だけが頼りだ。

東風（やませ）が吹き出してくると時化模様になる。沖が荒れて港に帰れなくなるのだ。沖に出ている船は次々と急いで港に帰ってくるが、親父の船は暗くなってもまだ見えない。そんな時、おっつかあは島の上にあがって荒れる沖をいつまでも眺めている。沖にぼつんとガス灯の明かりが揺れて、我慢できなくなるとそれが親父の舟に見えるのかふきすさぶ風に向かって「おどろ～、おどろ～」と声を振り絞って沖にさけぶ。

「どこにいるんだば、おどろー」。闇に叫んでもきこえるわけもないのに——。

「なにして、あつたらに怒鳴るんだべなー」

子ども心にそう思った。おっつかあの叫び声を聞いていると、さびしく、悲しくなってくる。

「おどろー、おどろー」の叫び声か、風に乗って追分のように聞こえた。追分の節のなかにはこんな声があるように満は思った。

やさしくて、悲しくて、だからおれは追分が好きなんだな——。

（松村隆『たば風に唄う 江差追分青坂満』より）

命がけの漁師の生活と、それを支える家族の思いを語る一節は、江差弁の語り口がもたらす効果とあいまって、豊かな生活で呆けた、賃金労働で暮らす都市生活者には足元にも及ばない圧倒的なリアリティで迫ってくる。今の追分民謡には、漁師のほかにも町の職人や色町で歌われてた唄も総合されている。いずれにしろ、その味わいは、そうしたさまざまな生活の持つリアリティに深く根ざしてこそ生まれたことを感じさせられる。これに匹敵する状況にねざしたリアリティを持つ歌を、都市生活者は持つのだろうか？ 理想的、抽象的な構築物をつくりあげる西洋音楽クラシックにしろ、世界共通の商業的、均質な響きを響かせるポップスにしろ、カプセルのように自分自身のなかに閉じこもっていて、かつての民謡のように、ざらざらとした土や雨風、ありのままの暮らしが広がる外の世界に向かって開かれていかない。

江差追分は、師匠が自分の家で授業料もとらずに教える道場で唄いつがれてきた。が、それが長く師匠やその家族の負担になってきた。この問題を解決しようと合同練習場をつくらうとしたのが追分会館のはじまり。江差追分全国大会の舞台になるほか、祭の櫓展示などもあり、江差追分を生み、育んできた町の歴史と文化の情報発信地にもなっている。

#### 参考資料

松村隆『たば風に唄う 江差追分青坂満』北海道新聞社

江差追分会館公式ホームページ

<http://www.hokkaido-esashi.jp/kankou/oiwakekaikan/top.htm>

## 2 | 子供たちに受け継がれている生きがいと誇りの芝居活動——篠路歌舞伎

篠路歌舞伎は、明治開拓期に本州より移り住んだ篠路村烈々布（現・札幌市北区百合が原）の青年達とリーダーの大沼三四郎（芸名：花岡義信）らにより、明治35（1902）年烈々布神社の祭りの余興として歌舞伎が演じられたのが始まりである。農村娯楽として、また愛郷心・団結心を高めるために始められたと言われている。この活動は、烈々布神社の境内に建てられ、村の集会の場・夜学の場でもあった「烈々布倶楽部」（建物の意）を拠点に行われた。この芝居活動は、地域に根差し生活する素人の人々が演技者となって舞台上に立った活動で、北海道民自ら「芝居」を創造した事始めと考えられている。

昭和9（1934）年には、交流が盛んであった烈々布の東隣十軒部落（現・札幌市北区篠路町上篠路）や隣村の丘珠（現・札幌市東区）より大沼の息のかかった同志が集まり、現在の篠路駅前付近に新築された「共楽館」にて篠路歌舞伎最後の公演が行われた。篠路歌舞伎の活動が終わり、芝居活

動は休止の時期もあったが、昭和17（1942）年の十軒での演芸会を期に、近郷では青年たちを中心に農村演劇の活動が盛んになった。しかし昭和30年代には、演劇活動は自然に消えていった。

これらの活動は、「ここをなんとかいいところにしよう」という地域に生きる人々の想いが込められ、人と人とのコミュニケーションの役割を担っていたようだ。また活動に関わった人々にとって、「いやし・自信や誇り・生きがい」であったようだ。

現在は篠路歌舞伎保存会の発足を期に、篠路中央保育園園児たちによる「篠路子ども歌舞伎」の公演が篠路コミュニティセンターにて行われており、篠路の芝居活動の歴史が引き継がれている。真剣に全身で演技に打ち込む子供たちの姿は感動的である。明治開拓期以来、この地域の風土に溶け込み、地域に根差して生きる人たちが自力で花を咲かせ果実を実らせ、次世代へ継承させているこれらの活動は、草の根的である。

### 3 お神楽の衝撃—深層の土俗とエネルギーを掘り起こす現代の語り部

古代からの民俗芸能「お神楽」。だが、実際にその現場を見聞きした人が現代ではどれだけいるだろうか。

そんな中、全国各地で伝承されているお神楽映像を解説付きで上映する「お神楽ジョッキー」が、静かな感動を呼んでいる。上映しているのは、札幌の神楽・伝承音楽の研究者にして音楽家の三上敏視さん。長年にわたって日本全国津々浦々に出向き、各地で伝承されているお神楽を記録してきた。2009年に初のお神楽ガイド「神楽と出会う本」（アルテスパブリッシング）を出版、それを契機に「お神楽ジョッキー」と題したビデオ上映と解説の夕べを始めた。

誰もが知っているようで、実際には殆ど見たことがないお神楽の面白さは、衝撃的でさえある。榊の枝を真剣で切りながらのアクロバティックな剣舞、3人の青年が舞いながら巨大な綱を編み上げていく映像、煮えたぎる熱湯を釜から素手で跳ね上げる神事、おなじみの獅子舞や山の神の出現など、それぞれに土着的でダイナミック、時には猥雑でエロティックなものもありながら、同時に歴史と神威をも感じさせる。

三上さん自身は、多摩美大芸術人類学研究所（中沢新一所長）の特別研究員であると同時に細野晴臣らとライブを行う現代音楽のミュージシャンでもある。お神楽の「伝承芸能」、「舞踊・アート・音楽」という両面を深く見通す見識と感性の持ち主だ。なればこそ、各地で撮影された映像と解説は、その地の神楽のエッセンスを捉え、誰が見ても文句無く面白い。

「神楽の背景にある信仰文化は、この列島に暮らした人々の生活の中から生まれたものだ。（中略）現代に住む僕たちも、そろそろ人間は自然を

コントロールできないことを身にしみてわかってきたはずだから、先人が長い時間をかけて培ってきた信仰文化を見直して、先人の気持ちと共振しながら生きていったほうがいいのではないだろうか」「神楽をはじめとする民俗伝統芸能をただの観光資源としてではなく、経済原理優先の今の時代とは別の原理で地方に生きる上での拠り所にしようという、もう一步踏み込んだ動きが始まっているところもある。都会の人間がうらやましくなるような『祭り文化』を地方で取り戻すことができれば、それは日本が再び『まっとう』になるために大いに役に立つのではないだろうか」と、三上さんは同書の「神楽と現代文明—あとがきにかえて」で語っている。

北海道でも、松前神楽、厚岸かぐら、室蘭神楽などが伝承されている。日本各地の風景、伝承、生活、思いに深く根ざした芸能が、三上さんという現代の語り部を得て、改めて現代人の心に届けられている。

・参考資料：三上敏視著「神楽と出会う本」（アルテスパブリッシング、2009年10月）

三上敏視さんのサイト <http://www.comco.ne.jp/~micabox/>

#### 4 | 歴史的建造物が「今」とともに生きる ～「ロング&スロー」を合言葉に ——NPO 小樽ワークス(歴史的建造物再生保存)

近代化と都市整備により、日本の多くの街が歴史的建造物を失ってきた。特に、開拓以降の歴史が浅い北海道では、明治や大正に建てられた歴史的建造物の多くが、さしたる反対運動もないまま、いとも簡単に取り壊されてきた。また、市民の側にも身近な学校や個人住宅などの歴史的建造物が「マチの財産」という意識は薄かった。今その反省とともに、近代の歴史的建築物の再評価と保存活用の動きが全国で拡がっており、道内でも、大学の研究者や市民有志らによる保存活用運動が各地で根付き始めている。

NPO小樽ワークス（遠藤謙一良代表）は、そうした団体の一つ。小樽市に残る坂牛邸（施主 坂牛直太郎氏、田上義也設計）の保存・再生・活用を通じて、小樽の歴史的建造物や景観の活用を考え、まちづくり活動を行なうために、2008年にスタートした。「高度成長が終わり、物事の価値を確かめ、質感を味わう現代において、この街にしかない、個性的な都市景観・固有の文化が、深く理解される時が来ました」と、その設立理念をホームページに謳う。

個人で手元における絵画や彫刻と違い、歴史的建造物は維持保存するのに膨大な経費がかかる。将来にわたって継続的に保存するには、地元住民と行政の理解と協力が不可欠だ。文化資産の価値の共有と活用保存という、正に今日の文化行政の最先端のような現場なのである。同NPOは、建物周

辺の清掃作業や雪おろし、建築の講演会など、地道な活動を通じて市民の理解を広げつつある。近代遺産を活かして、文化都市小樽をつくるという同NPOの試みは、まだ始まったばかりだ。

NPO小樽ワークス（歴史的建造物再生保存） <http://www.otaru-works.com/>

## 5

## 「炭鉱の記憶」を地域の資源に ——NPO法人炭鉱の記憶推進事業団

北海道の石炭生産は、1879（明治12）年の官営幌内炭鉱（三笠市）に始まる。1882（明治15）年には、石炭搬出のため全国で三番目となる幌内鉄道（小樽市手宮～三笠市幌内）が開通し、北海道開拓の先導役となった。その後、続々と開発された炭鉱によって、空知地域は国内有数の産炭地域となり、わが国経済の発展に貢献してきた。しかし、1960年代のエネルギー革命によって、地域の基盤産業であった石炭産業は一気に衰退した。

現在、空知産炭地域の人口は最盛期の1/5にまで減少し、高齢化率は40%を超えている。このような急激な地域変動に対して、当初は公共事業による地域振興を図ったが、ほとんど成果を生まず、各自治体ともに苦しい地域経営を続けている。

このような中で、1998～1999年の北海道空知支庁の調査を契機に、従来は「負の遺産」としてされてきた炭鉱遺産を、地域の固有性の表現と価値の源泉として捉え活用しようとする地域政策がスタートした。地域に残る炭鉱遺産は、立坑やズリ山など有形物だけではなく、ナンコ料理など食習慣、炭山祭りや盆踊りのようなイベント、語り部の記憶などの無形物まで広く定義され、「炭鉱の記憶」と総称され今日ではすっかり定着している。

当初は、空知支庁のイニシアティブで始まった取り組みだが、次第に市民側の動きが活発化し、2003年以降は市民側が行政に積極的な働きかけを行うようになった。2006年の夕張市財政破綻を契機にNPO法人炭鉱の記憶推進事業団が設立され、市民側の動きが本格化した。2008年度には、NPOの全面的な協力によって地域再生のマスタープランである「そらち産炭地域活性化戦略」（空知支庁）が策定され、この戦略に沿って2009年には岩見沢市に地域内外を結ぶ拠点として「そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター」が開設された。

わずか100年の短期間で、絶頂と没落を経験した北海道の空知産炭地域には、様々な人々の「思い」と、教訓や示唆に富んだ「場」が存在する。そのような「場」を活性化することによって、地域再生への新たな動きとして定着させるための活動が精力的に展開されている。特に、そのテーマとして「アート」に着目しており、2004年には住友赤平立坑（赤平市）で、

2009年には北炭幌内布引立坑跡（三笠市）で札幌市立大学の教員・学生の協力を得てアートインスタレーションが開催された。また、歴史的なつながりの深い地域と連携する動きも本格化しつつあり、2010年からは小樽・室蘭とともに「炭鉄港2010 北の近代三都物語」というキャンペーンも展開している。

地域内と地域外、過去と未来、形のある遺産と形のない記憶を結び、沈滞した地域に新たな動きを起こす取り組みは、ますます活発化している。

NPO法人炭鉱の記憶推進事業団サイト <http://www.soratan.com/>

## 6 埋もれた遺産 戦後知床開拓者達の歴史を掘り起こす ——母嶺レイ『知床開拓スピリット』

2005年に世界自然遺産に登録され、「手つかずの大自然」のイメージがある知床半島に、今からほんの40年ほど前まで、開拓者達がイキイキと暮らしていたことはほとんど知られていない。千歳市の写真家にして医師の母嶺レイ（つがみね・れい）さんの写真集「知床開拓スピリット」（柏艚舎、2007年）は、知床半島にひっそりと残る、開拓跡とその歴史を掘り起こした仕事。木々に埋もれつつある家屋や屋内に放置された鳥籠、神仏を祀っていた跡などから開拓当時の様子がうかがえる。今まで堅く口を閉ざしていた元開拓者たちへの2年にわたる取材によって明らかになった当時の生活の様子から、国策により開拓地を手放さざるを得なくなった経緯まで、170枚のカラー写真と当時のモノクロ写真46枚とともに詳しく語られたルポルタージュ。さまざまな理由から隠蔽され、誤解されてきた知床開拓の歴史を伝えている。

「開拓は悲惨だった、悲劇の歴史だった、という受け止め方は、あくまで実際の開拓者側の歴史を知らない外からの見方でしかない」「知床開拓とは、戦後日本のまだ高度成長期も始まらない未明の時代、国や自治体の助けも十分でない状態で、水や電氣を得る基本的なことから、家を建て学校を整備し子供達を育てることまで、何から何まで自分たちの手で行うという、人の知力とパワーを全開に繰り広げた歴史なのである」「ゼロから自分たちの手で暮らしを作り上げ、どんな困難も切り抜け生き延びてきた人々がいたという事実は、現代の私たちにとって大きな力となるはずだ。」（同書より引用）

過去は、ただ懐かしむだけのノスタルジーではない。真摯に向き合うことで、現在に生きる私たちが未来へ向かう知恵や力の源にもなる。戦後の知床開拓の埋もれた遺産の検証が、未来への貴重な示唆ともなっている。

参考書籍：「知床開拓スピリット—楯嶺レイ写真集」楯嶺レイ著 柏嶋舎  
(2007/12)

楯嶺レイ <http://homepage3.nifty.com/rei-t/>

知床開拓スピリット 楯嶺レイ写真集 <http://www.hakurosy.com/siretoko.htm>

## 7 | 開拓農民とコミュニティ 草の根文化の源を貫く ——NPOあおいたり 永田 まさゆき

地下鉄円山公園から車で10分の場所で、畑を耕し、山羊や豚、兎や蜜蜂を飼う自給的な生活を展開中。それをもとに農を多面的総合的に学ぶ「講座・農的くらしのレッスン」を主宰している。一方では建築家という立場でもある。

講座に訪れる人は街の人がほとんど。有機農法による野菜畑も、畑とよばず庭と呼んでみたり、作物を育てたり木を彫り鋤やベンチを手作りしてみるのが、そのまま都市生活批判の意味合いを帯びているかのよう。都市と田舎との中間のような場所に住みながら、そのインターフェイスを担うような役まわりである。

「農的くらし」を思い立つきっかけの一つには、建築家として住宅を手がけるうちに、現在のそれが単に家族がものを消費するだけの場所、あるいは休むという観点ばかりが強調される要素からなり、また労働といえども子供の勉強部屋しかないともいうような構成に、疑問と危機感を持ったからだという。そういう彼のバックグラウンドにあるのは、子供のころ北海道の日高で過ごしたときに見聞きした、開拓農民だったおじいさんの働くことと生活することが不可分にむすびつくライフスタイルの記憶。そして70年代、学生の時から参加した反消費主義的共同体で培った総合的な暮らしの理念。

小さなトンネルをつくぐれば都会の住宅地が広がる場所で、こつこつ手作りで自分の理想を追いながら、現代の浮遊しがちな生活を地面に近づけ、北海道の草の根文化の本道を貫こうとする。

同じ場所にあるレストラン「やぎや」は、その場所で取れたものがメニューの基本になっていて、奥さんが切り盛りしている。そこは彼らの精神にどことなく共鳴するアーティストやさまざまな職種の自由な人々のたまり場にもなっている。

NPOあおいたり

<http://homepage.mac.com/onnn/index.html>

アトリエ オン;

[http://homepage.mac.com/onnn/ONN/onn\\_home.html](http://homepage.mac.com/onnn/ONN/onn_home.html)

8

## アートプロジェクトと農業の出会い ——佐伯農場と東一条ギャラリー

酪農のマチ中標津町の、のどかな農村風景の中にある「佐伯農場」は、ただの牧場ではない。約100ヘクタールの敷地内に、レストラン、遊休サイロを活用した美術館や写真館、ギャラリー倉庫、またアートオブジェも多数点在する。1974年からは、東京近郊の子供達を対象に夏キャンプ「むそう村」の受け入れも続けている。

2代目オーナーの佐伯雅視さんは1975年に事業を引き継いだ。牛乳の消費が伸び悩み活路を模索する中、1988年に近郊の酪農グループとともに当時はまだ珍しかった農場レストラン「牧舎」を始めた。その後2001年から牧場内に美術館やギャラリーを開設し中標津ゆかりの作家による作品を紹介。農場コンサート等も企画する。2009年8月には中標津市街に「東一条ギャラリー」をオープンし、道東の作家の作品展示を始めた。他にも、2006年には歩く文化の復権を唱える「北根室ランチウェイ」を地元で立ち上げるなど、地域の中で「人が楽しく生きるには」を考え、新しい農村文化を提唱してきた。

酪農家として多忙な毎日を送りながら、その合間を縫って活動を展開する佐伯さん。牛も育てるが、根っからの人間好き。道内外から多くの芸術家や工芸家達が、佐伯さんの人柄に魅かれてギャラリーに集まる。「アートや音楽の活動をしている人が、目先の利益とか有名になりたいとかではなく、自分のやりたいことをただひたすらにやっている、その姿に魅かれます。そういう人達から得られるものが楽しくてやっています」と語る。

道東の農場で、現代人が見失ってきた価値観の再発見や、風土や農業に基づいた作品への応援がその草の根を拡げている。

※ 茨城県在住の彫刻家 宮島義清さんの「牧草ロールアート展2010」を展示中。牧草ロールを使った巨大オブジェが目を奪う。

展示期間 2010/4/29～2010/11/3 佐伯牧場 構内

佐伯農場 <http://www.muratasystem.or.jp/~saekifarm/>

東一条ギャラリー <http://e1gallery.web.fc2.com/>

9

## 農業と芸術、都市と農村の融合をめざして ——北海道農民管弦楽団の牧野時夫

北海道の農業のとても面白いところは、夢をもって帰農したインテリ農民が沢山いるところ。今でこそ全国的な現象になったが、早くから集中的

にそれがなされてきた場所として北海道は比類ない。そうしたインテリ農民が、農業の意味を問いなおしたり、農家の生活、農村コミュニティに新風を吹き込んできた軌跡は、北海道固有の文化の一部になっている。北海道農民管弦楽団を設立した牧野時夫さんも、大学修士号も持っている、そんな農民の一人。

北海道農民管弦楽団はその名の通り、北海道在住の農家を中心に、農協職員、農業試験場研究員などの農業関係者約70名が集う管弦楽団で、毎年、農閑期に集まっては演奏会を行う。

学生時代宮沢賢治の「農民芸術概論綱要」に共鳴したことがきっかけ、と代表者の牧野時夫さん。北海道大学交響楽団や社会人オケの北海道交響楽団でコンサートマスターをつとめながら農学部で修士号をとったあと、本州のワイン会社に就職するも、30歳のときにサラリーマンを辞め、「えこふぁーむ」という有機農家をはじめた。都市と田舎、インテリと農家、農業と音楽といった様々なコントラストを一身に体現する人だ。

彼が宮沢賢治から受け継いだ精神とは？ 専門家間でしか通用しないような「芸術のための芸術」の砦に閉じこもりがちな芸術を、太古の芸術がそうだったように、ふたたび日々の労働に結びつけ、また労働を祈りや自然と結びつける。それは、芸術にとっては、虚飾や権威主義から洗い清め、原点にもどすことになる。また農家にとっては、つらい労働を芸術で彩り、あたらしい農村文化をつくるころみにもなる。

社会のつくりからみても理にかなった、意味深い運動だ。同じ分野でどんなに緊密なネットワークをつくり、情報交換を行っても、均質集団の自閉性に陥る。が、農業と芸術のように一見遠い領域をつなぐ紐帯ができることで、その間を新鮮なインスピレーションが行き来し、関係者が新たな世界に目覚めるのだろう。

北海道農民管弦楽団が成功した今、牧野さんは新たなチャレンジとして「農民芸術学校」設立構想をあたためておられる。宮沢賢治の勤務した花巻国民高等学校もその流れをくんでいるデンマーク発祥のフォルケ・ホイスクーレをベースにした学校構想で、有機農業を中心とした自給的労働と創造的な芸術活動によって、現代資本主義の歯車にならずにすむ、自立した人間を育てるための学校とのこと。

草の根からの北海道の農村の未来のヴィジョンが強烈に発される焦点の一つになっている。

## 10 | 1日1日が即興で42年のジャズの日々 ——ジスイズ(ジャズ喫茶)

マスター小林東(あずま)さんが、1969年に新聞社を辞めて釧路市にオープンしたジャズ喫茶。ライブ収容人数最大50名の店内では、インタ

ーナショナルに活躍する一流のミュージシャンから、ほぼ無名の学生バンドまで、さまざまなプレイヤーが演奏してきた。まさに道東のジャズの拠点であるが、小林さんのアンテナに響いた演劇、写真、舞踏、映画、詩朗読などの公演や展示も実施され、道東のアートの拠点としても機能してきた。ジスイズの気配は、小林さんが最も深い愛情を注いでいるのが舞踏家、大野一雄であるということから察することができるかもしれない。内外の創造的な表現者たちと釧路の生活者たちが出会う結節点として、地域の精神風土に感動と生気を与え続けてきている。

ジスイズ（ジャズ喫茶） <http://www.jazz-thisis.com/jazz/Welcome.html>

## 11 彫刻を通して街の時の厚みをさぐり、市民を 美に向け結集させる——札幌彫刻美術館 友の会の「街なかの美を守ろう」運動

札幌には、500点近い野外彫刻が存在するが、風雨にさらされ、汚れ、痛んだまま放置されているものも多いという。これを何とかしようと、彫刻を愛好する市民ボランティアが立ち上がり、スポンジやブラシを片手に彫刻を磨き、保全、保護する活動が始まった。

非常に謙虚な活動に見えるが、これは実に奥が深い。市民ボランティアにとって、彫刻に親しみ、見る目を養ういい機会、都市の美観への意識も高められると、会長の橋本信夫氏は言われる。また、その都度、対象にする彫刻については、徹底的にその背景を探るという周到ぶり。彫刻に描かれた人物の伝記や、この彫刻がつくられ、その場所に置かれ、今、このような形で残っている経緯も調べられる。彫刻を通して、北海道開拓の足跡や進取の気概、ひいては戦中の金属回収例をどのようにくぐってきたかなど、街がくぐった歴史の厚みも見えてくる。

その成果を集大成すべく、札幌の彫刻情報のデータベースも作成中だという。草の根から街の美をささえる貴重な運動である。

参考サイト

北海道建設新聞社 <http://e-kensin.net/reading/408.html>

## 高齢者の概念が変わる——旧穂別町 (現むかわ町) の高齢者映画制作事業

支笏湖小学校で、子供たちと映画を作ったという映画監督崔洋一氏の話  
をきいて、町の老人たちが「おれたちも映画つくれるべか？」とつぶやいた  
のがきっかけだったという。斉藤征義さん（当時は穂別町職員、現在退職）  
が仕掛け人となった映画制作事業。「老いを力に」を合言葉に、平均  
年齢70代、最高年齢は90代におよぶ高齢者が脚本・監督・製作・出演・  
編集まですべてをこなす。血压測定からロケが始まる状況で、ロケ中に出  
演者が亡くなったことも。しかし映画にはこれまで人が想像もしなかった  
ような老人のパワーがみなぎり、多くの人々を元気づけ、これから本格的  
な高齢化社会を迎えつつある私たちに、老人の新たなロール・モデルを示  
して国際的な反響を呼ぶ。今年に入ってシリーズ第4作目を制作中。

映画の反響のおかげで小さな町に外国も含めた遠方から人が訪れるよう  
になり、芝居心は日常生活にも浸透し、老人たちは最期まで生きがいと張  
りのある日々を送っている。映画の面白さもさることながら、映画を企画  
し、作り上げ、フィードバックを得るそのプロセスのなかで、人が変わり、  
町が変わっていったプロセスの全体が、すぐれたコミュニティアートとい  
える。

映画には、高齢化のみならず、過疎や経済的な疲弊、それにとまなう市  
町村合併による地域アイデンティティの危機といったまちが抱える問題が  
主題化され、創造力のばねとして利用されている。地域のおかれた状況の  
そのままに深く根ざし、ネガティブをポジティブに変えるすぐれた草の根  
的な文化事業である。

他地域への波及効果もめざましく、彼らの熱気が飛び火するように、「お  
れたちも映画つくれるべか？」とつぶやく人の輪が広がっているという。  
帯広市では老人たち、札幌市の西区では保育園児と父母たちによる映画作  
りがはじまり、いずれも旧穂別町からスタッフが出張して指導した。こう  
した草の根映画事業の広がりが、今後どのように人を変え、地域を変えて  
いくか、楽しみである。

## 「病気も個性」精神障害の概念を変える ——べてるの家(浦河町)

精神障害者への地域の支援体制の弱さをなげきつつも、地域経済の弱体  
を目の当たりにして、その惨状を自分たちの苦しみと重ね合わせたとき、  
逆に自分たちこそ「地域のために昆布を売ろう」と発想を転換、起業運動

をはじめたという1984年設立の北海道浦河町にある精神障害のための地域活動拠点。社会福祉法人浦河べてるの家（2002年法人化—小規模授産施設2箇所、共同住居12箇所、グループホーム3箇所を運営）、有限会社福祉ショップべてるなどの活動の総体。障害者、介護者、医師などからなる、そこで暮らす当事者達にとっては、生活共同体、働く場としての共同体、ケアの共同体という3つの性格を持つ。

「昇る人生から降りる人生へ」「偏見差別大歓迎」、「弱さを絆に」といった一見逆説的だけど、妙に地に足ついた脱力系人生哲学を実践。ユニークな当事者研究でも知られ、日本の精神保健におけるベスト事例の一つに選ばれている。障害者が自分の幻覚や妄想の発表などを行う「べてるまつり」は全国的な反響を呼び、障害あつての祭りの盛り上がり、2010年の幻覚&妄想大会では積年の障害者に「治ってないで賞」を授与するにいたる。

障害者を正常の鋳型にはめるよりも、ありのままに生きる権利をみとめ、社会のなかに居場所を作っていく自助的な運動体としてのその姿は、きわめて草の根的だといえる。

べてるの家（浦河町） <http://bethel-net.jp/>

## 14 人が表現することの根源を照らす ～地域のアウトサイダー・アートの拠点 ——NPO ラポラポラ

人は、なぜ表現するのか。アウトサイダー・アートの作品は、衝撃とともにそんな思いを見る者に抱かせる。

アウトサイダー・アートとは、美術界や教育とは無縁の世界で独自に制作する作家たちによって創作される作品の総称。元々はフランス語の「アール・ブリュット（生の芸術）」の訳語だ。昼間は掃除夫として働きながら誰にも知られること無く膨大な作品群を残したヘンリー・ダーガー（『非現実の王国で ヘンリー・ダーガーの謎』としてドキュメンタリー映画化）や、郵便配達の際石とセメントでフランスの片田舎に奇想天外な宮殿を独力で築き上げたシュヴァル、刑務所の囚人が独房の木壁にスプーンの柄で彫り続けた曼荼羅のような壁画、日本では山下清や、各地の社会福祉施設の入園者や障害者達が作る作品が知られている。いずれも作者の人生経験が培った独自の哲学や世界観が反映されている。これまで多くはゴミとして捨てられ、芸術の一画として評価されるようになったのは近代に入ってからのことだ。作品の多くは、他人の目を意識せずに自らの表現衝動だけを動機に秘かに製作され、既存の美術の技法によらず、時として素朴、時として緻密、時として過剰な野性味で観る者に「人が表現する」ことの根源を問いかける。

旭川のNPOラポラポラでは、アウトサイダー・アートを紹介している。代表の工藤和彦さん（40）はプロの陶芸家。およそ20年前、滋賀県信楽で陶芸修業中に、同県の福祉施設の知的障害者等が制作した作品に出会い、アウトサイダー・アートの世界に魅せられた。この事をきっかけにして、知的障害者の福祉施設で職員として5年間陶芸を教え、その後、陶芸家として北海道で独立。全国で活躍する一方、「人々が障害の有無や様々な境遇を越えて、アートを通して交流する事でお互いを理解しあえる関係を推進する取り組み」を掲げ、2006年12月に旭川市に常設ギャラリー「ボーダレス・アートギャラリーラポラポラ」をオープン。陶芸家とアウトサイダー・アートの紹介者の、二足のわらじで活動してきた。道立旭川美術館でアール・ブリュット／交差する魂展（2008年1月）やアロイズ展（2009年10月）を招聘したり、道内作家の展示などを行ってきた。旭川管内でのアウトサイダー・アートの認知度は高くなり、常設ギャラリーの役割は一段落」として2010年5月にギャラリーを閉鎖。現在は北海道各地で作品の発掘、展示、シンポジウム等を行う事で、アウトサイダー・アートの普及活動を行っている。また、北海道のアウトサイダー・アートの情報を国内外の関係機関に伝えている。

閉鎖空間で作られていた作品が、外の世界に出ることで、作り手と地域の人々や家族との関係が変化する事例は多数報告されている。また、多様な価値観や考え方を受け入れる社会になることで、社会全体も豊かになるのではないか。アウトサイダー・アートが現代社会に投げかけてくる問題は大きい。

参考資料：

アウトサイダー・アートのネットワーク構築へ 旭川のラポラポラ  
(2010/07/15)

日本財団ブログ・マガジン

「アウトサイダー・アートの魅力と視点」工藤和彦（「美術ペン」130号、2010年春号、2010/04/15発行）

NPOラポラポラ <http://npo.lapolapola.com/>

## 15 | 自由な発想でマチの魅力を創る ——写真の町・東川町

若者が流出し高齢化が進み駅前にはシャッター商店街に、という共通課題に悩む北海道の市町村のなかで、東川町は、16年前の6900人から現在は7800人と、人口が増えている元気なマチだ。昨年1年間でも人口は約80人増加している。東川町は、旭川市から車で約30分の近郊にある自然豊かな田園都市。その魅力は、住民の元気な「人材力」が作っている。

東川町は、1985年に世界で初めて「写真の町」を宣言した。世界で活躍する写真家を顕彰する「写真の町 東川賞」は今年で26年目、全国の高校生が写真の技術と感性を競う「写真甲子園」は17年目だ。全国から予選を勝ち抜いた18校の高校生カメラマンが写真の町に集結し、幼児から小学生・高校生、婦人会から一般企業もボランティアとして裏方で大会を支え、過去に参加した経験を持つOBの一部は毎年自腹でボランティアをしに戻って来る。その他、フォトフェスタの開催や町内各所での写真展開催など、写真文化は確実にマチに蓄積されてきた。写真自体はまだ誕生して170年程度の文化だが、東川町は町民の協力を得て、マチ独自の文化を新たに育てているのだ。

他にも、木工のマチという特性を活かし、東川町で生まれた赤ちゃんに毎年オリジナルの椅子を贈る「君の椅子プロジェクト」、新たなスタイルの婚姻届、コーヒーサイズの缶に東川産のお米「ほしのゆめ」約1合を詰めた「米缶」の開発など、東川町を巡る話題は尽きない。

東川町も、15年前まで他の市町村同様、人口の流出に悩まされてきた。どこのマチも、財政難、市町村合併の検討など厳しい状況が続く中、東川町の松岡市郎町長は「住民福祉の向上。繁栄、安全・安心、幸福なまちづくり」を掲げた。「予算がない、前例がない、他の市町村ではやっていないというネガティブでなく、ポジティブに発想して仕事をしよう」と職員の自由な発想を奨励、上記のような様々なアイデアが実現した。現在、東川町の職員や町民は住民であることに誇りをもち、自在な発想でマチの元気を作っている。自由な発想を生かせる風土が東川町の元気な文化を支えている。

東川町のホームページ

<http://town.higashikawa.hokkaido.jp/>

写真甲子園 公式サイト

<http://town.higashikawa.hokkaido.jp/phototown/koshienofficial.htm>

16

## 木工の文化を現代感覚で 世界に目を向ける 若手木工作家の活動ユニット ——mickle【ミクル】 旭川クラフト(旭川圏)

旭川家具といえば世界に聞こえたブランド。豊かな森林資源と多くの職工を抱える旭川圏は木工文化の一大拠点だ。作家の工房に大規模な木材倉庫がないのも、本州の作家には驚きだったという。材料の木材は近郊で安定して入手できるからだ。一生付き合える旭川家具だが、高価で重厚なイメージがあり、普段使いの日用品とはなりにくい面もあった。

そうした中で、2006年11月、(有)高橋工芸の高橋秀寿氏を中心に、旭川

を拠点に活動する若手クラフトユニット「mickle (ミクル)」が結成された。2010年の現在、メンバーは12名。それぞれが自分の工房で制作を行い個人で活動する一方、ユニットとして道内外で展示や販売、ワークショップなどを行い、新しい旭川発のクラフト文化を紹介している。参加メンバーは主に工房の2代目の若手達。実直無骨な印象が強かった旭川クラフトの底力に、現代的なセンスを持ち込んだ。

作例をあげると、創立当時の中心メンバーだった高橋秀寿さんが企画開発した「KAMI Glass」シリーズは、全国どの展示会でも人気が高い。ロクロ挽きによる木製テーブルウェアのベテランだった高橋さんの技術を見込んだバイヤーが、「紙のように薄い木挽きグラス」を提案。ガラスでなく木で、という試みだ。試行錯誤の末に完成したグラスは厚さが僅か2ミリ。灯にかざすと向こうが透けて見える。その技術と感性は驚きと評判を呼び、日本デザインコミッティー企画展「デザイン物産展ニッポン」(2008年東京)の各県1品の北海道デザイン代表に選ばれた。高橋さんはその後ミクルを卒業し、現在は後続の若手達の活動を陰から支えている。

旭川圏の木工文化の層は元々が厚い。20年以上にもわたって、木の家具に限定した「国際家具デザインコンペティション」が開かれ、世界50ヶ国から応募がある。エントリーしたデザイン画を地元メーカーが試作し、実物にして審査する。世界中から集まるデザインと、地域の技術力とが結び付き、新しい家具文化を発信する底力をたたえているのだ。

今、若い世代が中心となり、地元で蓄積されてきた草の根の技術と文化を、一般にも開かれた形で発信し始めている。

サイト <http://www.kinomama.co.jp/mickle/>

ブログ <http://blog.mickle-jp.com/>

## 17

## マチの文化は宝物 ～見えていなかった足元の再認識から

自分のマチの文化や風物を、日常で意識している住民はどれだけ居るだろうか。

市場や銭湯など、失われつつある身近なマチの文化を長年にわたって収集・記録してきた研究者、塚田敏信さんは、その魅力を地元誌や市民講座で精力的に伝えている。

毎晩、買い物の主婦達で賑わった商店街の光景、店主自慢の売切御免のコロッケ、店先で仕事をしていた昼屋さん、縁日さながらに賑わった売り出しのチラシや写真……。塚田さんの写真資料が呼び起こすのは、かつて確かに我々が持っていたマチの文化の姿、そしてそれを当たり前支えてきた各地のコミュニティーの活力だ。

塚田さんは現在、札幌篠路高校の社会科を教えている。塚田さんが「マチの文化」に目覚めたのは、高校教員になって初赴任した釧路での体験がきっかけ。味わいある古い建物などさまざまなマチの文化について、地元の人に聞いてみたところ、「多くの人にとって、それまで札幌で私自身がそうだったように、自分のマチの歴史や風物自然は『空気』のように全く意識されていない」ことに気付き、衝撃を受けたという。それを契機に「マチの文化を見つめ直す」活動を開始した。教え子の高校生達と一緒に地元の古老や商業関係者への聞き取りを行い、年度の終わりには記録集を発行した。今では、その冊子にしか残っていない貴重な記録もあるという。その後、札幌へ転勤。ここでも聞き取りやマチの文化の掘り起こしを続ける中から、2005年に外部講師を招いてのシリーズ企画「篠路高校図書館講座」をスタートさせた。

同校名物「図書館講座」は知る人ぞ知る。写真家、作家、編集者、美術作家、研究者など第一線で活躍する「北海道の宝物」ともいうべき人々を講師に招き、高校生とともに一般の参加者がお話をうかがう人気企画だ。最近では、「東京バンドワゴン」シリーズの人気作家小路幸也さんや、ちまちな人形シリーズで注目を集める高山美香さん、北大公共政策院の中島岳志准教授などの方々をゲストにお招きしている。

毎日見ていながら実は「見えていなかった」足元の文化の認識から始まった活動は、いま、各地の図書館や文学館、また再振興策を模索している札幌各地の商店街やマチおこし団体とも連携しながら、多くの人を巻き込んで、草の根の活動を広げつつある。そこから浮かび上がって来るのは「昔は良かった」ではない。今、我々がそれぞれのマチで楽しく豊かに生きることは、どういうことなのか、ではなかろうか。マチ文化のこれまでの蓄積が、マチの未来を見る者に静かに問いかけてくる。

## 18 住民が自ら関わり評価される手ごたえが、留萌のマチに 新たな活気を呼ぶ——留萌地域情報サイト～ (株)エフエムもえる、るもいファン、ネット

「市民発・草の根の情報貴重」とはよく耳にするが、実際に普通のマチの住民達が楽しんで自分の話をしに集まるユニークな情報ネットが、道北の留萌地域で地元の高い支持を集めている。

留萌市のコミュニティラジオ放送「(株)エフエムもえる」(2004年放送開始)、ウェブサイト「るもいfan.net」(2008年開設)、月刊フリーペーパー「るもいfan通信」(2008年、各号5000部発行)の3媒体が融合したメディアミックスがそれ。農家や酪農家、漁師、主婦、地元の中学生、地元企業の社長など、多彩なパーソナリティーが日替わりで留萌駅前の放送スタジオに集い、地域密着型のオリジナルな情報を発信する。「あそこに行ったら何

か面白いものがある」「誰かに会える」「自分の放送ができる」「自分の知っていることを知らせたい」など、マチの人々は各自で放送局に魅力を見つけて集まってくる。番組出演、原稿作成、音声調整などの実働ボランティアは、ゲストを含めて週約150人。応援ボランティアは約900人（人口の約3%）にのぼる草の根の市民メディアだ。

(株)エフエムもえる編集局が情報を一元管理し、サイトは毎日更新される。道北の留萌地域（留萌市、増毛町、小平町、苫前町、羽幌町、初山別村、遠別町、天塩町、幌延町）が対象。旬の食材や人やイベント、観光情報などを、各地の情報員（約50人）が収集し地域内外へ発信している。

(株)エフエムもえる社長の佐藤太紀さんが1996年に留萌に帰った当時、住民の間には「留萌には何も無い」という声ばかりだった。都会中心の評価では劣等感しか生まれない。留萌での生活がハッピーであるには、何が必要なのか。佐藤さんは「人が“自由意志”で関わり、その結果或は経過が、まわりに評価されること。これは、社会的な動物として、社会と関わるという根源的な幸福感につながる。住民感性（住民がその地域の魅力を感じ、楽しむことができる能力）を高めることが必要」と考えた。そのため「情報、食といった、人間が生物として生きてゆくために、無条件に必要なものの結束点、或いは、社会の仕組みの中ではプラットフォームとして、たまたま都合がよい放送局を開設しました。これが同時に留萌のことを知り、留萌の魅力～（正しい）誇りにつながるのだろうと考えています」とも語る。

実際の「るもいfan通信」8月号の紙面では、「てしおキムチ工房」の代表の取材、季節の食材トウモロコシのプチ蘊蓄、小平町や増毛町の産業まつり、地元の無声映画上映会やトム・プロジェクト（東京）の「鬼灯町鬼灯通り三丁目」苫前町公演の予告などが、美しい編集で紹介されている。記事としての客観性と、「お隣りさん」の人肌の温もりの絶妙なバランスが、使えて楽しい高品質な「マチの情報」となっている。

マチの情報発信は、地域への愛着と誇りを育む。また、発信のプラットフォームを市民が共有することで、自らが地元の魅力を客観的にみつめる姿勢を住民一人一人にもたらす。この情報ネットは地域活性化の事例としても全国から注目を集めている。

・参考資料：総務省 地域人材活性化事業「地域人材ネット」

「地域の情報員による地元情報の受発信システム構築」

株式会社エフエムもえる 代表取締役 佐藤太紀

[http://www.soumu.go.jp/main\\_content/000027239.pdf](http://www.soumu.go.jp/main_content/000027239.pdf)

留萌地域情報サイト～(株)エフエムもえる、るもいファン、ネット～

<http://rumoifan.net/>

19

## カフェ・ハチャム ～包摂と参画の時代に先駆ける発寒商店街の試み

全国各地で地域の商店街の空洞化が著しい中、札幌に「地域の縁側」として地域の活性化拠点となっているカフェがある。大型スーパーの進出や道路による旧商店街の分断などで、かつての賑わいが失われていたマチの空気が変わり始めた。一体ここで何が起きているのか？

仕掛け人は、北海道大学公共政策大学院で政治学を教える中島岳志准教授。老人の孤立死や2008年の秋葉原の殺傷事件など、個人の社会的な孤立が様々な社会問題を引き起こしていることを指摘。翻って、かつての商店街が持っていた社会的包摂の力に着目した。寂れ果ててしまった商店街に「地域の縁側」の役割を取り戻せないだろうか。「新しいジモト主義」を作ろうと、2009年2月にオープンさせたのがカフェ・ハチャムだった。住民が互いの顔が見え、世代を越えて声をかけあうことが出来、それぞれの距離感で関わることの出来る「ゆるい空間」だ。毎週土曜はイベントを企画し、住民だけでなく多種多様な外部の人々が関われる仕組みも取り入れた。

チラシづくりや企画づくり、運営にまで、中島ゼミの学生たちが「こんな面白いことはなかった」と楽しんで参加。中島准教授は「現代の若者は、かつてのように『良い暮らし』をすることよりも『社会的に意味のある生き方』を望む傾向が強い」と指摘する。

また、商店街の人々も変わり始めた。カフェ・ハチャムの店舗改装は、商店街の人々が手仕事でそのほとんどを完成させた。その技術に若者が驚き、商店街のメンバーも自分達の力を再認識した。違う世界の人々が出会うことで、自分達では気付かなかった価値を再発見し評価する。社会の中で行動し、何がしかが変わり、評価される面白さを、ともに味わい、次へのモチベーションが生まれていった。

「何をやっても衰退は止められない」と諦めの空気があった商店街だが、カフェが動き始めると、地域住民自身が主体的に運営を行うようになり、新しい提案にも面白がって挑戦するようになった。2010年には、市場跡地に若手芸術家を支援するNPO h.i.p-a (ヒップエー) が運営するHACHAM ART COMPLEX (ハチャムアートコンプレックス) にアーティストが入居してきた。カフェ・ハチャムを通じて、今、商店街に新しい風が起り、コミュニティは新たな「縁」を住民や学生や外部と結び始めている。

「人がいきいきと暮らしていくには、自分とは異質な他人や弱者を排除しないコミュニティから、世代や業種を越えた人のつながりを作り出す必要がある」(北大広報誌「テラ・ポプリ」39号、中島准教授とカフェ・ハチャムの紹介記事より)。

「個人の社会参画と包摂」が大きな課題となる現代、カフェ・ハチャムの挑戦が示唆するものは大きい。

カフェ・ハチャム <http://hacham.jp/>

・参考文献：「リテラ・ポプリ」39号「商店街にある、大学と社会の接点  
カフェ・ハチャム」北海道大学総務部広報課発行、2010年2月発行  
<http://www.hokudai.ac.jp/bureau/populi/edition39/index.html>

## 20 道内の小演劇ネットワークの拠点の一つにして、住宅街の劇場空間 ——ドラマシアターどもIV (江別市)

安念知康さん（愛称：ども）夫妻が経営する劇場だが、自らが主宰する劇団「ども」の活動を軸にして、貸し画廊やライブ空間としても活動している。これまでに、前衛舞踏、自主上映、ジャズ、ブルークラスなどのライブ、詩の朗読、落語、自然食、寺山修司系の文学企画などを手掛けてきている。江別市内で何度も移転を繰り返し、4回目にして安住の地を得た。住宅街で劇場スペースを運営する難しさと、それを乗り越えてきた不退転の精神が、この「ども」の歴史によく現れている。地元根付いた創造的空間として、地元の劇団、地元のバンド、地元のアーティストによる公演・展示を核に、市外（道内・道外）の表現者たちの公演、展示を組み込む絶妙なバランスを保っている。

ドラマシアターどもIV <http://dorama-domo.com/>

## 21 まちとアートを結ぶ草の根の活動 ——NPO法人コンカリーニョ

<http://www.concarino.or.jp/>

2002年8月、演劇・ダンス・音楽の発表とその創造の場として愛され、多くの人に惜しまれつつも取り壊されたフリースペース・コンカリーニョの同じ場所への再建を目指し、2003年9月に設立。「まちとアートの縁結び」をテーマに、商店街のイベントへのパフォーマー派遣、地元札幌市西区の人々の出演による演劇作品のプロデュースなど、リーダーの斎藤ちずさんを中心に様々な活動を行う。とくに現代ダンスにおいては、北海道の拠点とあっていほどのプログラムの充実ぶりをみせている。

2006年5月、「生活支援型文化施設コンカリーニョ」として念願の再建を果たし、旧劇場同様、地域の人々、アーティストに愛される劇場を目指している。現在、コンカリーニョ他、ターミナルプラザことにPATOS、あけぼのアート&コミュニティセンターの施設運営を行っている。

特に毎年恒例の、子供からお年寄りまでの地元西区の人々出演による、地域の歴史をテーマにした温故知新音楽劇は、地域のアイデンティティを持つきっかけとなる活動として、地元の人々に親しまれている。

※『劇場通信 2007. 1-2』NPO法人コンカリーニョ発行 を参照

NPO法人コンカリーニョ <http://www.concarino.or.jp/>

## 22 札幌劇場史の流れを見すえて ——活動体としての劇場の担い手 レッドベリースタジオの飯塚優子さん

札幌4丁目プラザ7階の自由市場にかつてあったホールのマネジメントの仕事についたきっかけで、1970年代小劇場、アングラ劇に深くかかわるようになる。その後、演劇、映画を中心とした自由な創造、発信の場だった熱気あるインデペンデントフリースペース、駅裏8号倉庫の成立と運営に尽力。自由にアイデアを飛ばたかせ徹底的に議論しながら進めるこのスペースの共同運営体制は、草の根文化のマネジメントのお手本の一つ。駅裏8号倉庫がなくなった後も、人の出会い、コミュニケーション、創造性を蓄積するメディアとしての空間づくりを、新たに個人運営のフリースペース、レッドベリースタジオで実践することになる。

制度としての演劇の枠組みや劇場の壁を越えて、広く社会状況にも働きかけ、新しい世界を作ろうとした小劇場時代の精神を受け継ぐ貴重な人物。近年、ことに既成の枠組みにこじんまりとまとまる表現が優勢になってきたのに危機感を抱き、箱ならぬ活動体としての劇場を提唱。演劇の持つコミュニケーションのポテンシャルを掘り下げ、世代や障害、マイノリティの壁を超え相互理解を深めるワークショップや、高齢者の語りによる地域史の編纂と演劇への取り込みなど、社会の中での演劇の役割を深く掘り下げるアウトリーチ活動もさかんに行われている。広義の演劇性を社会に生かすこうしたアウトリーチ活動により、演劇人たちの生活を成り立たせ、演劇創造そのもので食べていくという広大なプランもあたためておられる。

レッドベリースタジオ <http://www.akai-mi.com/>

## 人の流れが蘇らせるまちの息吹 ——演劇と富良野

1981年から2001年まで放映された連続テレビドラマ「北の国から」は、富良野の自然、人と暮らしの価値を引き出し、全国の人々に知らしめ、政治や経済になしえない圧倒的な文化の力で過疎の町を蘇らせた。その反響で富良野は、対抗文化的で自立した生活に共感する全国の演劇青年たちの一種のメッカとなり、富良野に住んで演劇を学びたいという彼らの期待にこたえて1984年、「北の国から」の脚本家、倉本聰が設立したのが富良野塾だ。2年間の授業料は一切とらず、農作業しながら共同生活を送り、生活費を稼ぎながら脚本、演劇を学ぶコミュン風な塾で、2010年の閉塾までに375名がここに学び働き、そこから全国、世界各地へ演劇公演に出かけて行った。卒業した塾生の中、40数名が富良野に定住している。田舎暮らしにあこがれて全国の主に都市部から移り住む人々がかもたらす影響力や、従来の住人にはない形で、土地を新鮮な目でとらえ直す視点は、今日の北海道を形成してきた重要な要素の一つで、ここにはじまったものではない。が、このドラマの影響と富良野塾の存在は、この波が組織的、持続的になされる窓口となり、人の流れが確実にまちを変えていった。

この流れを一過性のものに終わらせず、まちづくりにつなげようと富良野市は2000年、劇場、「富良野演劇工場」を設立。しかしその運営は、富良野が育ててきた演劇人が中心となり、演劇好きの市民ボランティア等がささえる全国初の認定NPO法人「ふらの演劇工房」。作ったのは市でありながら、企画には行政は関わらず、文化関係者が文化関係者による企画という近年増えてきたものの、地方都市にはまだまれな運営方式は、初年度から実効性を発揮。質の高い企画と安定した黒字経営にこぎつけた。その背景にはボランティアの活躍と、たぐいまれな組織力、市民に劇場企画運営の醍醐味を学んでもらう「市民プロデューサー育成事業」に代表されるような市民連携の強さがある。が、秘訣は自分たちが心底楽しんでいると、それにつられて自然と人は集まってくるという「天の岩戸方式」。高圧的なイデオロギーが背後にあるわけではない、草の根的な努力の積み重ねだという。

「目標は富良野を演劇の町にすること。すでに市民の演劇を見る目は他の町よりずっと肥えています！」と、演劇工房事務局長と工場長を兼ねる太田竜介氏。演劇と富良野の物語の今後のストーリー展開が楽しみである。

### 参考資料

北海道ふるさと新書『富良野市 もうひとつの「北の国から」』北海道新聞社2003年

ふらの演劇工房 <http://www.furano.ne.jp/engeki/>

24

ホールで育つ子供たち  
～あさひサンライズホールがマチと描く夢～

公共ホールは優れたまちづくりの装置となりうる。それを体現する意欲的な自主事業を次々と打ち出し、全国から熱い注目を浴びているのが、北海道士別市の「あさひサンライズホール」（1994年オープン）だ。

演劇製作は、誰もが参加することが出来る場所を提供できる、優れたコミュニティ・ツールとしての側面も併せ持つ。表方裏方含め全員に役割があり、全員が一つの舞台を作り上げる感動を共有する。また、公演をきっかけに、人と人とを新たに出会わせたり、住民同士が関係を深めたりすることで、地域コミュニティの成熟を助ける。

企画・運営を担当するのは市教育委員会の漢幸雄さん（50歳）。1993年から、朝日町（当時）職員として開設準備にあたり、2005年の士別市との合併後の現在まで、プロデューサーとして活躍する。開館当初から、演劇を中心に質の高い鑑賞型事業を展開。それを実現させるために、道内の公共ホール同士のネットワークを作り上げ、共同招聘で手間と経費の負担を軽減するなど知恵を絞ってきた。オープン10年目の2003年、満を持して住民参加劇に着手。長期間のワークショップを経て、プロの脚本と演出の指導による住民劇を毎年上演するようになった。

また、オープン当初から子供の舞台経験を重視、地元小中学校の学校祭をホールが全面支援。全校生徒たちは、ホールの照明と音響の中で演じ歌い踊る体験を楽しむ。2007年からは、市内の全17の小中学校に、プロの芸術家を授業に派遣するアウトリーチ事業を行っている。舞台芸術を楽しむ経験をした子供達が大人になり、自分の子供に芸術の楽しみを伝え、この循環が続けばマチ全体が文化を愛する町になる、という目論見だ。実際に、学校側からは「生徒が自分で考え、発言し、行動するようになった」と評価が高い。また、同ホールの子供達を相手にワークショップを開いたアーティスト達は「鑑賞眼が出来ている」「舞台に馴染んでいる」と口を揃える。「子供は地域の宝物。継続して関わり続けることが大事」と漢さんは語る。

コミュニティ・ホールとして地域を活性化してきた実績を認められ、サンライズホールは2005年度JAFRAアワード（総務大臣賞）を受賞した。

行政マンとして、いま公共ホールが行うべきことは何か、学校や住民と緊密な連携を図りながら、マチの将来を見据えて布石を着々と打っている。

※旧称：朝日町サンライズホール（市町村合併により平成17（2005）年9月以降、あさひサンライズホールと改称）

士別市あさひサンライズホール <http://www6.ocn.ne.jp/~sunrise/>

（2011年7月11日原稿受理）